

最東端の海から活力ある水産業や 漁村の将来像を実現

小倉 啓一 (おぐら けいいち)

歯舞地区マリンビジョン協議会 会長

農山漁村における地域の活性化や、個性的で魅力ある地域づくりの優れた活動を紹介するシリーズ。

今回は「わが村は美しくー北海道」運動第9回コンクールで特別賞を受賞した団体、「^{はほまい}歯舞地区マリンビジョン協議会」会長の小倉啓一さんにお話をお伺いしました。

《地域の特徴を活かした地域活性化へ向けて》

歯舞地区は、本土最東端の根室半島に位置し、南は「太平洋」、北は「オホーツク」に面する海域を有し、根室市の地域漁村として機能を維持してきました。戦後は北方領土を当時のソ連邦に占領され、大きな領土と海面を失いましたが、しばらくして漁業体制は「沿岸から沖合へ」、「沖合から遠洋へ」と進出し、根室市の大きな地域漁業基地として活況を呈していました。しかし、1977年ころ200海里水域を設定する国が急速に増えたため、漁業体制を縮減せざるを得なくなり、中型漁業の衰退から地域の人口減少を伴い、徐々に活気が薄れていきました。

こうした背景から、現存する歯舞地区の特徴を活かし、地域の活性化を図るために種々の沿岸漁業対策を施し、沿岸漁業の振興を図ると同時に2006年「歯舞地区マリンビジョン協議会（以下、協議会）」を設立しました。協議会では「最東端の海からのメッセージ!」をキャッチフレーズとして、様々な地域活動を実施した結果、歯舞地区を訪れる人々は年々増加していきました。



開催が待ち望まれる「歯舞おさかな祭り」(2019年)



《歯舞の豊かな「食」・「漁業」・「自然」を活かし》

歯舞といえば「はほまい昆布しょうゆ」が全国的にも有名です。その他にも協議会では、22ある漁業部会がそれぞれ水産物のブランド化の取り組みを行っています。さんま部会の「一本立ち歯舞さんま」、秋さけ定置部会の「歯舞しゃけ丸」、たこかご部会の「金たこ」、^{まいおう}専門刺網部会の「舞王」、^{まいつたら}はえなわ部会の「う、舞鱈」など22の商標登録をして商品のブランド化に成功しています。

また、都市との漁村交流の取り組みとして「渚泊」を実施しています。これは、2011年度に根室管内1市4町が取り組む「北方領土を目で見る運動」の修学旅行誘致事業で、大阪教育大学附属天王寺高校を漁民泊で受け入れたのがきっかけです。その後、「歯舞の豊かな「食」・「漁業」・「自然」を民泊で体験!」と銘打ち全国に誘致活動を展開し、受け入れ団体も増加していきました。渚泊では、「市場セリ見学」、「地引網体験」、「こんぶ加工場見学」、「組合食堂朝食受入」などメニューも豊富で他地域の自治体・観光団体が視察に訪れていました。ですが、新型コロナウイルス感染症の影響で、2020年から渚泊や他のイベントの開催も中止を余儀なくされました。

2022年8月、国の直轄事業により「歯舞漁港の人工地盤施設」が整備され、それと併設して「衛生管理型市場・直販店舗・購買店舗・防災施設」を有する歯舞漁業協同組合が完成しました。9月には地元の根室高校の生徒を招いて見学会をリスタートしています。

最後に小倉会長は「2023年は、中止していた渚泊や歯舞おさかな祭り、歯舞こんぶ祭りの催事を再開し、たくさんの人たちに喜んでもらい、歯舞地区の活性化に貢献したい」と意気込みを語ってくれました。

※ 当協会ホームページ、開発調査総合研究所・調査研究報告書から「わが村は美しくー北海道」運動第1～9回受賞団体の活動概要をまとめた冊子をご覧ください。